

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



枝もたわわに稔った渾源県呉城郷のアンズ。カラー画像をGENのホームページでご覧いただけます

Contents

加藤登紀子さん大同訪問	P 3
夏のワーキングツアー日誌から	P 4
植物を育てる(最終回)	P 6
雲南だより(1)大陸改造と異常気象	P 7

2004.9

99

有機農業体験報告

皆木 晃 (農業)

7月24日、有機農業を実践されている原田農園さんを見学させていただきました。20年以上という有機農業ではベテランの農家です。

ずいぶん山奥まで電車を通したものだと感じながら能勢電鉄の終点、妙見口駅を降り、さらにバスに乗って20分くらい。原田農園に近いバス停で降りたのは10時半前でした。バスを降りてはじめてわかったのは、このバスの乗客のほとんどが今回の有機農業体験の参加者だったということです。車で直接こられた方もいらっしゃいましたが、参加者は29人。夏休みに入ったこともあってか子どもさんもたくさん参加されていました。

はじめに案内された水田ではちょうど合鴨が集められ、水田から外に出される場所でした。合鴨農法はテレビでしか見たことがなかったのですが、

田植えの直後から放たれて雑草や虫を食べて育った合鴨はすっかり大きくなっていました。私も農業をしている(3年目ですが)ので、一番気になっていたこと、合鴨は稗を食べてくれるのか、ということをお聞きしたところ、稗はほとんど食べてくれないので人が抜くのだとのことでした。

次に露地のキュウリとハウスのトマトを見せていただきました。キュウリは虫の被害にあい、すでに収穫できない状態で、私達の見学を待って後片づけを始めとのことでした。農薬を使わないとダメージが大きいです。どれほどの収入減になったのか、同じ農家としてはそちらが気にかかります。それでも残っていたキュウリをもぎ取ってその場で食べたり、持ち帰ったりしました。

トマトも葉に病気がきていて、あまり見せたくないんだけど、とおっしゃってました。肥料も自家製の堆肥が使われたり、手作業で受粉をし、ホルモン処理されていないあたり徹底されてると思いました。味は甘味があり、やはり有機栽培は違うなあ、と思いながら昼食の後もたくさんいただきました。

原田さんにはお忙しいなか作業のお邪魔をしましたが、有機農業の実情や農家の後継者問題など色々お話を聞かせていただきました。



もいでもいいかな? 隣のトマトは赤く見えます

大同緑化プロジェクト見学会報告

吉富 茉莉 (日中環境研究会)

北京を中心に、中国在住の人にも気軽に大同に来てもらおうと、滞在期間の短い見学会をはじめました。第1回目は、7月17日、18日の2日間。現地集合・解散のキャンプに、10名が参加しました。

北京のある日本人の知り合いから、自分の子供(現地校に通っている高校生)が環境ボランティアに興味を持っていると聞いたことがありました。6月下旬に、大同の緑化プロジェクト見学会のお知らせをいただいた時に、私はすぐさまそのお子さんを思い出しました。しかし、夏休みを利用して英語

の勉強をするために、すでにアメリカに渡っていました。来年はもっと早く声をかけようと思いました。今年は、中国のことももっと知りたいと言って別的高校生を連れて行きました。

今回の見学会は現地滞在者のために企画した1回目の見学会です。中国で仕事をしている方から留学生まで、みなさん熱心に参加されました。特に人数から見ると、留学生の参加は半分以上を占めていました。忙しい勉強のかたわら、なにか留学の思い出になるものを探しているうちに、GENのHPで今回の企画を知った方、将来自分に合った仕事とは何かを考えているうちに、この黄土高原にたどり着いた留学生の方もいました。彼らの話を聞いて、私はこの緑化プロジェクトの理解者に、

若い方が増えてきたような気がしました。

モンゴルのバオでの宿泊はもちろん初めての体験です。暑くも寒くもなく、心地よく眠ることができました。カササギの森での自然とのふれあい、高山植物の美しさ、そして、植物専門家の遠田先生の分かりやすい解説、どれも得がたい体験でした。また、現地スタッフの努力で、おいしい農家風の料理もいただくことができました。污水処理施設の見学は、小さな投資で大きな効果を出せる、中国の水問題の解決にふさわしいモデルを見た思いでした。

農村の家屋の見学を案内してくれる方が、この見学団は全員中国語がしゃべれることで、驚き、また、喜んでくれました。今後も継続的に大同を訪れ、回数を重ねていけば、農民との交流が深まると同時に、大同と北京の環境の連鎖が実感され、環境が直面する現実から目をそらさない勇気が湧いてくると、私は期待しています。



バオの泊まり心地は快適だったとか



UNEP親善大使

加藤登紀子さん大同訪問

国連環境計画（UNEP）親善大使の加藤登紀子さんが、中国訪問の一環として、7月20日、21日に大同を訪れました。そのときの様子を、高見事務局長のメールマガジン『黄土高原だより』から抜粋・アレンジしてご報告します。

呉城郷は、アズズの収穫の真っ最中だったんですよ。熟したらすぐ収穫しますから、毎年7月に大同にきていても、収穫のようすをみるのは私も初めてです。

登紀子さんは枝もたわわに実ったアズズの前で、ポーズをとってくれました。

村の党書記の話では、1畝＝6.7アールあたりの収穫は1,000元になるそうです。アワ、キビ、ジャガイモだったら、100元にしかならなかったもので、すでに10倍です。

とてもよく実っていると思うんですけど、これでも、昨年には及ばないそう。成り年と裏年とがあって、ことしは後者。

2軒の農家を、家庭訪問しました。1軒は窯洞（ヤオトン）です。

そのあと、村の小学校、生徒たちと交流。登紀子さんは歌唱指導までするサービスぶりです。こどもたちにもみくちゃにされました。それがまったくの自然体で、すごいねえ！

市内に帰って雲崗石窟をみたあと、環境林センターをみてもらいました。

最後に、職員や臨時工のまえで、また何曲かうたってくださったんです。

設備は悪いし、聴衆はひとにぎりだし、歌詞は通じないし……それでも、全力投球なんですね。

私はとくに、裏方で取り仕切っておられるお姉さんの幸子さんの熱心さに感動しました。

今回の大同訪問は、登紀子さんにとって充電になってくれたらいいと、私は考えてたんですよ。できるだけたくさんみてもらって、彼女の活動に役立つところがあればいいと思って。それなのに、こんなにサービスしてもらっちゃって……。

別れ際に、新著にサインをしてくださったんですね。その最後に、「大同にて」と書いて。

うれしいですね、ファンのひとりとして。

* * * * *

加藤登紀子さんの中国訪問のレポートが、加藤さんのホームページ、TOKIKO WORLDに掲載されています。

<http://www.tokiko.com/unep/index.htm>

高見事務局長のメールマガジン『黄土高原だより』は、melma! のマガジ



呉城郷で子どもたちに歌唱指導する加藤登紀子さん

ンID m00017010で、不定期（だいたい週刊ペース）で発行しています。GENのホームページの『黄土高原だより』目次からも購読申込みができます。

GEN講演会 文人趣味の 国際協力

GENの勉強会とか講演会は、いままで理系のお話が多かったのですが、今回は一味違います。講師にお招きする山形洋一さんは、お仕事の専門分野こそ理系ですが、語学、音楽、文学、映画など多彩な関心と特技を国際協力の現場で生かしてこられました。興味深いお話がうかがえそうです。

日時：10月4日（月）18時30分～20時30分

場所：大阪市立総合生涯学習センター第2研修室（大阪駅前第2ビル6階）
参加費：700円

講師：山形洋一さん（JICA国際協力専門員）

問合せ・申込み：GEN事務所まで
講師からのメッセージ

「外国語が得意で、作文と絵が好き、歌もカラオケなら歌うが、しかしどれも趣味の域を出ず、……。国際協力の

基本は、異文化コミュニケーション。家族とともに生活した国は、グアテマラ(5年)、トーゴ(1年)、ブルキナファソ(3年)、タンザニア(4年弱)。最近では後進の育成に心がけています」

ご寄付

小学館『地球を緑に』キャンペーン（株）小学館から、「21世紀こども百科地球環境館」（4,400円。04年12月31日まで発売記念特別定価3,990円。）の売り上げの一部100万円を黄土高原緑化のために寄付していただきました。



緑と私たち、地球の命、みんなつながって……

夏のワーキングツアー日誌から

8月23日～30日、GENの黄土高原ワーキングツアーを実施しました。フル参加者30人にくわえて、途中一部参加者3人が現地地で合流するなどにぎやかなツアーでした。秋のはじめにしてはまだ暑く、おなかをこわす人が多くでるなど大変なこともありましたが、それぞれに忘れ難いなかをもつて帰ってきたようです。ツアー日誌の中から、一部抜粋して紹介します。

【8月24日】

同じ黄土高原の中でも、水利の比較的ましなところと不利なところ（つまり低いところと高いところ）で作物の種類が多い少ない、出来不出来がはっきり目に映る。道端の草花も高いところは少なく、水に比較的恵まれた場所には種類も少しは多くなり、その分色も多彩だ。

夕刻、苑西庄村に大歓迎をうけながら到着。3年生までの小学生が1人の先生に学ぶという小学校の教室を見、そこに荷物を置いて昔掘った古い井戸、といっても、1960年に人力で掘った直径1.5mぐらい、深さ34mの釣瓶で汲み上げる式の井戸を見学。もちろん水は1滴もなし。つづいて1998年にボーリングして掘り当てた井戸を見学。176mの深さから上ってくる冷水が勢いよく鉄パイプの口から吹きだすさまは快感すらおぼえる。各戸にパイプで送られる水は、炊事に家畜の飲み水にも利用され、もちろん畑の灌漑にも使われている。そのためか作物にも勢いが感じられるのは気のせいかな。

人びとの表情も明るい。貧しいには違いないが、各人目が生き生きしている。多いに学ぶべきかな!! (西峯亮三)



苑西庄村の潤れてしまった古井戸を見学する

3年ぶりに訪れた三嶺村。前回は3月だった。3月の三嶺村は黄土高原の象徴のような風景であった。今回のそ

れは私の頭の中の原風景とは別物だった。霧が立ちこめ、緑に覆われた広大な畑だった。あの快晴の空に広がった広大な黄土の畑を想像することもできないものだ。黄土高原も夏、それも今年のように雨の多い夏には黄土は緑に覆われ豊かな稔りをもたらすことを忘れていた。(中略)

民泊も前4回と大きく違った。前4回は食事を家族と完全に分離していた。今回は子どもたちと一緒に、大人も加わってにぎやかだった。かつて現役時代に友人が家に来たとき、私の子どもたちが来客にまつわりついていたことを想起した。(石原務)

【8月25日】

苑西庄へは97年以来何度も訪れているが、水が極端に欠乏していたときは雲泥の差の現在の生活を見るにつれ、水の大切さを痛感する。もし98年のボーリングが失敗していたら、現在この村が存在しているかどうか。多分廃村になっていただろう。(遠田宏)

昨夜来の雨に、道はグチャグチャ。ツルリとなり、泊めていただいた農家のトイレ行は、すべて落ちたらどうしようと、恐怖そのものであった。

しかししかし、おこないのよい人が大勢いたようで、早朝にシトシト降っていた雨はカラリとあがり、絶好の植林日和となった。

植えたのは仁用アズを400本! ほどよく湿った土は穴ほり作業などには好適な条件となり、村の人たち、子どもたちといっしょに気持ちよく植林を終えることができた。どうぞ無事に活着してくれまうように(100円ショップで入手したプラスチック製の移植ゴテは、小さな作業には有用!) (今泉誠子)



1本1本、大切に植えます

人生史上初の植樹。藤原さんに教わりながら、なんとか1株目完成。「このために来たんだ……」としみじみ。これまで高見さんはじめ遠田先生、石原先生……みなさんのお話をうかがって、そのあとの作業。自分の中の大きな渦巻きがぐるぐるまわっている感じ。緑と私たちと、地球に住む人たち、みんなつながって大きなサイクルを作っているのだと実感しました。(中略)

この2日間で最も大きく感じたことは、貧しさと教育の問題です。当然、この問題についてはひろく知られており、自分も子どもを育てる教師として思うところはたくさんあったのですが、実際にこのような社会に住む子どもたちを目の前にすると、何も言えずただ涙がでてくるだけでした。何が幸せで何が不幸せなのかはみんな違うものさしがあるので私にはわかりません。けれども、あの子どもたちが生きていくこの先の未来、豊かな心で健やかに生きていくためには学ぶ機会が等しく与えられるべきではないかと私は思うのです。

「私は勉強したい」という彼女だけでなく、無限の可能性を持つあの子たち、世界中の子どもたちに学校があれば。学校に行ければ。しかしその無理(?)なこと、不可能な現状も、当然わかっているのです。ああ、すっきり



しません。(市川麻美)

【8月26日】

昼食はメンバーがわかれて、村民の家でご馳走になりました(小生は王迎才さんのお宅)。ご馳走は本当においしいものであった。素直にこれまでのツアーの中でNo.1であった。特においしかったのは、羊の肉。聞くところによると、王さんの息子さんの大学入学祝いも兼ねたご馳走で、本日のために羊を1頭しめて、その肉を調理いただいたとのこと。はじめに出た普通の羊肉とは比較にならないやわらかさと、うまさであった。謝謝!

14:30~呉城小・中学校の生徒たちとの交流会。こちらからプレゼントで持参したボール類やなわとび等で子どもたちとたっぷり1時間交流をおこなった。小生は中学校時代にクラブに入っていたバレーボールで子どもたちと遊ぶことにした。1時間という時間であったが、数名(3~8名?)の子どもたちにアンダーパスの仕方をボディランゲージで伝え(参加メンバーも含む)結果、終盤には、それなりの格好がつくところまで上達し、ラリーができるようになった。最後に参加メンバーで記念撮影(パチリ)。(松島清)

【8月27日】

昼食後、13時20分作業開始。今回の植林樹木はアブラマツ。苗が小さいので掘る穴は小さく、シメシメ思っていると「掘りプロ」と「植えプロ」の分担発想が提起され、シメシメは雲散霧消する。

約1時間の作業の休憩時に中国側が「下雨(雨が降る)」と騒いでおり、急遽作業は中断となって取るものも取らずのあわただしさで帰途へ。

カササギの森への分岐から幹線道路に出たのは15時15分。間もなく20分には夕立(スコール?)となりまさに間一髪の脱出となった。10分前にはまさにありえたであろう状況の一端が、大同市内のどこどこで川となっていることを見たのが、みなさんのおどろきの印象でしょう。(斉藤公徳)

25日に広霊壘苑西庄村、26日には渾源県呉城村の両小学校附属果樹園とともにアンズ苗を植えた。両村農家の

経済力を向上させることが学童たちの教育レベルと進学率の向上につながると判断したGENの決断は正しいと思う。一時、アンズのような経済林を植えることへの批判もあったように覚えているが、農家の経済基盤がしっかりしないと、子どもたちは学ぶ機会を奪われてしまう。この当然のことを理解している村ほど、学校果樹園への取り組み姿勢がよく、成果もあげている、という高見さんの話はうなずける。食用の粟畑を減らしてでも、カネになるアンズの木を植えようとする農家の決意には相当な覚悟がいる。

ところが、同じことを志向しながらも両村の農家には大きな収入格差があることに驚くのである。

ホームステイをした苑西庄村のAさん(62)の年収は1,000元。これだけでは生活費がまかなえないにもかかわらず、村では富有なほうだとされている(息子と嫁は出稼ぎで留守)。一方、呉城村は30,000元の農家も出現するに至っている。GENが目指す方向からすれば、呉城村はすでに目的を果たしたのではないかと考える。同じ経費をかけるのであれば、他の貧困農村にもっと援助の手を差し伸べるべきだとの思いを強くした。(草陽一)

【8月28日】

このツアーのサブメインであろう万人坑の見学。話は事前にきいてはいたが、見た瞬間には言葉を失った。累々と積み重なる人骨。今にも叫びだしそうなミイラ、小さすぎる骨。「以人換煤」人をもって炭に換える。まさにその通りで、1937年に日本軍が占領してからの8年間で1400万tの石炭を奪い、6万人あまりの人が亡くなったという。人、1人につき石炭250tではあまりにも軽すぎる。

しかし、命の重さを教える教育の場で、この事実を習った覚えがまったくない。このようなことで本当の日中友好ができるはずもない。奇しくも、サッカーアジアカップで、反日感情があらわになった後だけに、実にリアルに感じられた。

その中国で緑化事業を日本人がおこなおうというのだから、高見さんたちの苦労ははかりしれない。中国でなにかしようと思っても、そこには必ずといっていいほど暗い歴史が影をおとす。それをふまえ、互いを理解しあいながら木を植え、木が育つように、ゆっくりと大きく友好関係も育っていかねばよいと思う。

数十年後または数百年後に中国の沙漠を森にかえた人びととして、高見さん遠田先生をはじめ、緑の地球ネットワークの方々、教科書に登場することを願いつつ、北京へ向かう夜行列車の車中、筆を置きたいと思います。(永尾大作)

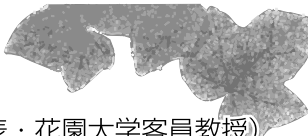


子どもたちとハンカチおとしを楽しむ

ツアー中に私が植えた木の本数はほんの少しだけど、日本から参加することが中国の人たちにとっていい刺激になるのなら、どんなに少数でも木を植えることそれ自体に意味があるんだと思います。

ツアー全体をとおして私は数えきれないぐらいたくさんのことに感動したし、たくさんのことに驚かされました。普段日本で生活してるなかでは体験できないようなことをさせてもらって、いろんなことを考えました。もうすぐツアーは終わるけど、ここで考えたことはずっと忘れたくないし、この旅行だけで終わらせずに自分でなにか行動を起こしてみたいな、と思っています。(杉山晶子)

植物を育てる (30)



立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

最終回

「植物を育てる」は主に苗木の育成や種子の発芽のことを書いてきた。このような内容の書物はたぶんどこにもないだろう。実際に育苗したいと思っている人には役立つはずであると自負している。もうこの内容でこれ以上書くことはないの、今回で終わりにさせていただきます。

最後にもう1度述べておきたいことは、組織培養や、挿し木などの栄養繁殖で増やしたクローンの苗木で植林することだけは絶対にやめてほしいという点である。その理由はもういう必要はないと思うが、遺伝的にまったく同じ遺伝子の集合体を作っても、その種が残ったことにならず、環境の激変があったら全滅してしまう恐れが大きいからである。栽培植物と元の森林の種類とはまったく別の植物だからである。学校の教科書にでてくる実験の材料植物はすべて栽培植物をつかっているの、栽培植物と野生植物との違いに気づいていない研究者がたくさんいるからである。

砂漠は緑化できるのか？

以前にしるしたが本当の砂漠は植物が育たないから砂漠になっているのであって、人が苗木を植えたからといって森林になるはずがない。その主な理由は水がないからであるが、人が手伝ってやれば森林ができると信じ込んでいる人たちがいる。人が手伝って、少しでも緑の地帯ができれば、植物の蒸散で空中湿度が上がり、雲ができ、雨となって、地上に降り、少しずつ緑のある場所が増えてゆくのである、と信じている人たちである。しかし、この発想には確たる証拠はない。またそのような実例もない。地球レベルでの地上と水圏との水の循環についてのおおまかな計算はできるが、地下水についての収支はまだだれにもわからない。降水量の少ない地域での地下水の高いところは、オアシスとなって人の飲料

水などに貴重である。そのような場所は植物を植えると育つが、蒸発した水分がどこへいくのかははっきりしない。何処かへもたらずことは確かであろうが、その地方から水分が移動するに過ぎない、といったことにならないのか？

われわれGENが植林している場所は砂漠ではない。かつて森林があったといわれている地域であり、そのような砂漠化した場所は植えてやれば育つであろう。かつて森林だったのだから。気候風土的要因から、昔から原則と

して森林が存在しない地域や、原則的には樹木が育つはずである地域であるにもかかわらず、特殊な土壌や原石や塩や酸や毒物などのために森林が育たない場所もある。これらの区別を知ることにはきわめて重要である。これらを一見しただけで判断できるようになるためには、あらゆる樹木の種類や土壌や水系の知識と気候的要因の詳しい情報とその解析能力が必要である。いまもっとも重要なことは、大昔から「無植生の土地」だったのか、かつては植生があったのに人為的になくなったのかの判断である。この判断にはいろいろの専門的知識を駆使する必要がある。「とにかく、植えたらいいじゃん」というやり方だけは止めてもらいたい。

2004.8.12

黄土高原史話 <21>

東西ほぼ時を同じくして

谷口 義介 (摂南大学教授)

アテネ・オリンピックでは、何といっても女子マラソン。

マラソンの丘をスタートしてゴールのパナシナイコ競技場まで激しい起伏あり、特に25キロから32キロ地点にかけて標高差80メートルの上り坂。スパートする野口みずき、歩道脇に坐りこみ手で顔をおおって泣くポーラ・ラドクリフ。

上空ヘリのカメラから見ると、コース周辺の丘陵には、造林したためか豊かな緑。ギリシアの風土については先入観があり、これは意外な発見でした。

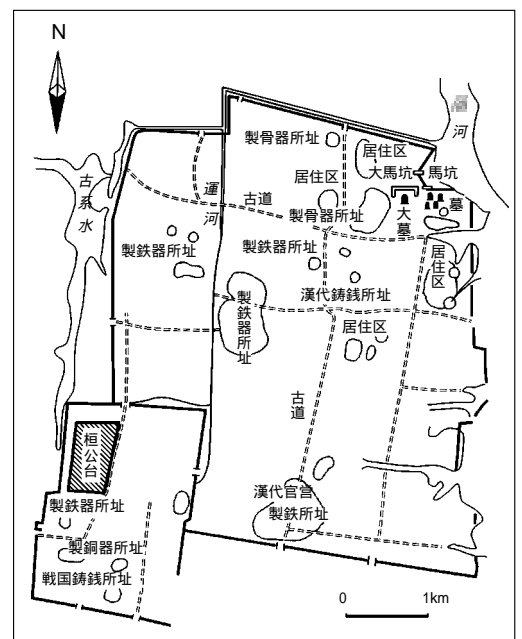
「山々は土におおわれた小高い丘をなし、今日<石の荒野>と呼ばれているところは、肥沃な土壌に満ちた平野がひろがっていたし、山々には木々の豊かに茂る森があった。

「つい先だてまでは、それらの山々から、大建築物の屋根を葺けるほどの樹木が、数多く伐り出されていた」(田之頭安彦訳 プラトン『クリティアス』の

描くアッティカ地方の景観です。

プラトンが生れたのは第88回オリンピック祭の第1年目だから、B.C.428年。

アテナイの歴史のなかで人口が最大だったのはその前後で、市民身分20万弱・在留外人1万強・奴隷10万強で、総計30万以上。都市アテナイの拡大



にともない、アツティカ地方の森林破壊が進みました。

眼を東方に転じると……。

「牛山は以前は樹木が鬱蒼と生い茂った美しい山であった。だが、斉の都臨淄（りんし）という大都会の郊外にあるために、大勢の人が斧や斤でつぎつぎと伐りたおしてしまったので、今ではもはや美しい山とはいえなくなりました。」（小林勝人訳）

『孟子』告子（上）にある一節です。

孟子の生年はB.C.372年。宣王（在位B.C.319～301）のとき斉に滞在しましたが、その頃、周囲20キロの臨淄（図）には兵卒だけで21万、その他をあわせると70万。「牛山」も都市化が森林を食いつぶした一例です。

さらに引用を続けると……。

「夜昼となく生長する生命力と雨露のうるおす恵みとによって、芽生えや

^{ひこばえ}葉が生えないわけではないが、それが生えかかると人々は牛や羊を放牧するの、片はしから食われたり踏みまじられたりしてしまい、遂にあのようにツルツルの禿山となってしまった。」（同上）

プラトンからも再度。

「当時の国土は、毎年、ゼウスからの実りの雨を享受して、しかも現在のように、地肌をむきだしている大地から海へ、たちまち雨水を流しさってしまうようなことはなく、いたるところ豊かな流れに恵まれていた。」（同上）

その後アツティカ地方を対象に3度森林保護条令が出され、孟子のあと荀子も時節に応じた伐採・植林の考えを述べているのですが……。

過放牧による緑の喪失、樹木乱伐による水土流出。あたかも黄土高原の現況を見るが如し。

本の紹介

『水の警鐘 世界の河川・湖沼問題を歩く』（渡辺斉著・水曜社・1,600円＋税）

新聞記者である著者が、文字どおり世界を歩いて取材した水問題を1冊の本にまとめました。アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの、渇水、洪水、汚染、開発と、カバーする地域や問題の内容も広く、たくさんのインタビューが現場の声を伝えます。黄土高原の水不足をはじめ、世界各地で深刻化する水問題は、それぞれに孤立しているのではなく、地球全体のバランスがくずれつつあるあらわれなのだと感じさせられます。

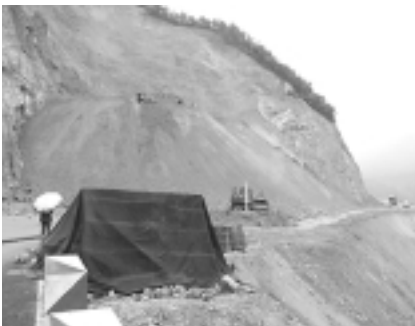


雲南だより〔1〕

大陸改造と異常気象

茂田井 円（GEN関東ブランチ）

今年の4月から雲南省の省都・昆明に家族で住んでいます。1年間滞在する予定です。昆明は、車社会へ猛スピードで突入しているらしく、主要道路は自転車道を含めた片側4、5車線道路、中心街にある旧道は、あらゆる所で拡張工事中です。そのためバス路線が、知らぬ間にしばしば変更されてしまいます。郊外には大型スーパーマーケットが立ち並び、自家用車で買物する人でごった返しています。これだけ広い道路でも朝晩の渋滞は深刻で、空気もすっぱくなります。交通事故も何度、目撃したことが。



土砂くずれの現場

地方にいくともっとすごいことになっていました。6月に雲南省北西部にあるシャングリラから南西に移動したのですが、がけ崩れのため3時間も足どめされました。昨年末にオープンしたばかりという道路は渓谷の急斜面を削って、平らな路面を中腹に作りだしただけのもの。崖は剥き出しのまま。真っ赤な山肌には雨の流れた痕が幾筋もついています。見ると土砂は、さらにがけ下の急斜面に生えた木々や畑をなぎ倒し、谷底の川を真っ赤に染めています。復旧工事は、ショベルカーを山の中腹に備え付けて、ただ土砂を除くだけです。地元の人慣れたもので、開通するまでの数時間、トランプをしたりしながら静かに待っていました。

今夏は各地で大雨が降り続けました。新聞を読んでいたら、まさに私たちが通過したところで7月末に土砂崩れの犠牲者が出たというではありませんか。山頂から8万立方メートルの土砂が崩れ、通過中の男女8人を車ごと飲み込み、そのまま130メートル下の谷底ま

で流れ落ちてしまったということです。またシャングリラから麗江に抜ける道からも急峻な山肌を削った高速道路の建設風景が見えました。こちらは削った崖をコンクリート舗装し、間に芝生のような草を植える、日本でおなじみの治山処理を行っていました。それでも谷底の川は、流れ落ちる土で真っ白でした。

現在、中国では江沢民の頃からのスローガン「西部大開発」という国策のため、雲南省や青海省方面では、道路などの建設が急ピッチで進んでいます。一方、雲南省では6月下旬からの大雨による土砂崩れなどの災害損失が、7月29日までだけで41.2億元（約560億円）にのぼるそうです。省政府は稀に見る異常気象による暴雨のため、といっていますが、無理な建設による人災も大きいのではないかと、思わずにはいられません。

1970年代、田中角栄が推し進めた列島改造の時代もこんな感じだったのでしょうか。こちらは大陸改造と規模がけた外れですが、やがて日本と同じ経済の袋小路に、近いうちにはまってしまうのではないかと、環境の悪化にどう対応すればよいのか、との思いが頭をよぎりました。



**国際協力フェスティバル 2004
見る、聞く、ふれる世界の今！**

GEN 関東ランチも出展します。
ぜひ、お立ち寄りください。

日時：10月2日（土）・3日（日）
10時～17時 入場無料

場所：日比谷公園（地下鉄「日比谷」
駅、「霞ヶ関」駅、JR「有楽町」駅）
主催：国際協力フェスティバル2004
実行委員会（（株）ジェイコム内、
TEL. 03-3546-1185 FAX. 03-3546-
1165 e-mail : icf04festival@jtbcom.
co.jp URL http://icf.visitors.jp/）
お手元の外国コインをご持参くださ
い。日本ユニセフ協会を通じて世界
の子どもたちのために役立てます。
ゴミの持ち帰りにご協力を。

地球環境市民大学校 市民と環境NGOの集い
交流・共感・行動へ

見たい聞きたい話したい！
環境NGOってどんな活動しているの？
地球環境基金から助成をうけて活動

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主
催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。
なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

している近畿の環境NGOが、それぞ
れの活動を紹介します（第2部）

日時：10月3日（日）10時～17時

場所：キャンパスプラザ京都（JR
京都駅ビル北側）

プログラム（予定）

第1部 10時～12時 パネルディス
カッション『環境NGOと自治体との
パートナーシップ 活動の現在とこれから』

第2部 13時～16時40分

分科会 森林保全・緑化、自然保護・
保全・復元への取り組み 大気・水・
土壌環境保全、環境保全型農業による
水環境保全の取り組み 総合的な環境
教育の取り組み 循環型社会形成と総
合的な環境保全活動 地球温暖化防止
への取り組み

交流会 17時～（要会費）

定員：170名 参加費：無料

主催：地球環境基金

企画・協力/運営：（特活）環境市
民（〒604-0932 京都市中京区寺町
通二条下る呉羽ビル3階 TEL. 075-
211-3521 FAX. 075-211-3531 e-

mail : life@kankyoshimin.org URL
http://www.kankyoshimin.org)

参加申込：氏名、郵便番号、住所、
電話、FAX、e-mail、所属、参加す
る部（第1部、第2部、交流会）希
望分科会（第1希望、第2希望）を
ご記入の上、上記環境市民まで、郵
送、FAX、e-mailで。

**国際公開シンポジウム
アジアの人びとと語る
日本のODA50年**

日時：10月9日（土）13時～17時30
分（開場12時30分）

場所：上智大学10号館講堂（JR中
央線、東京メトロ「四ツ谷」駅3分）
資料代：1,000円

同時通訳あり 事前申し込み不要
問合せ：（特活）アジア太平洋資料
センター（〒101-0063 千代田区神
田淡路町1-7-11東洋ビル3F TEL.
03-5209-3455 FAX. 03-5209-3453 e-
mail : office@parc-jp.org URL
http://www.parc-jp.org)